

大学史資料センターの存在意義と東伏見移転

大日方 純 夫

一 資料センターの機能

大学史資料センター（以下、資料センター）は、一九九八年六月の大学史編集所の発展的改組による設置以来、早稲田大学（以下、本学）の歴史、創設者大隈重信および関係者の事績を明らかにし、これを将来に伝承するとともに、比較大学史研究を通じて、本学の発展に資することを目的とする業務を展開している。資料センター規程が定めるその機能は、①資料の収集、整理および保存、②資料の調査、研究およびその成果の発表、③講演会、公開講座、シンポジウム等の開催、④資料の公開およびレファレンスサービス、⑤レファレンスルームに関する事項、の五点である。とくに、①およびこれと連動する②・④が中心的な機能であり、本学の歴史そのものに関する資料公開とレファレンスサービスの機能であることから、大学の「窓口」としての性格を強くもっている。②については、『早稲田大学史

『記要』の編集・発行にあたるとともに、二〇〇四年度より『大隈重信関係文書』全一一巻の翻刻・出版を行なってきた。さらに、二〇一〇年度からは、百五十年史編纂事業が正式にスタートし、その事務を中心的に担うこととなった。また、③・④ともかかわって、この間、年三回（春季企画展・受贈資料展・秋季企画展）の企画展示に取り組んだり、また、学生に対する正規の授業として、オープン教育センターにおいて「早稲田学」を開講し、前期に「創設者大隈重信」（二五回）、後期に「近代史のなかの早稲田大学」（二五回）の講義を行っている。

資料センターは、本学の歴史に関する記録・記憶の集積機能を担っており、記憶の中核ともいべき機関である。同時に、歴史的な記憶の再生機能と情報の発信機能を担っている。レファレンス業務の面でも、学内各箇所（秘書課・校友課・広報課・学生部等）、教職員、学外者・卒業生、マスコミ・出版関係等からの照会と資料提供に対応しており、大学の「顔」としての役割を果たしている。現在、本学が推進しているWaseda Vision150を実現していくうえで、早稲田の歴史と伝統を系統的に集約・調査・研究・公開・発信していく機関の存在は不可欠である。したがって、本来ならば、大学の中心機関として、本部キャンパスのなかにこそ位置づけられるべき性格をもつものである。ちなみに、慶應義塾大学の福澤研究センターは三田キャンパス、明治大学の明治大学史資料センターは駿河台キャンパスと、いずれも本部キャンパスに位置づけられている。

ところが、当資料センターは、本年（二〇一三年）夏、早稲田（本部）キャンパスから（西武新宿線を利用して）四五分程度を要する東伏見キャンパスに移転した。この移転は、資料センターのあり方の基本にもかかわる問題なので、その経緯につき、やや立ち入って記しておくことにしたい。

二 資料センターの移転問題

資料センターが本部キャンパス内の二号館（旧図書館、現會津八一記念博物館・高田早苗記念図書館）から、本部キャンパスの外郭に位置する一二〇号館（旧早稲田実業校舎）に移転したのは、二〇〇八年九月のことである。以来、事務所が一二〇―一四号館の五階、資料庫・レファレンスルームが一二〇―一四号館の地下一階となり、移動手段が階段しかないという厳しい環境条件のもとで、鋭意、業務を展開してきた。五階の事務所スペースでは、一般事務にあたることも、主として『大隈重信関係文書』の編纂業務を推進してきた。地階の資料・レファレンスのスペースでは、資料の受入れ・整理・保管・公開業務と、レファレンス業務にあたってきた。また、これとは別に、二〇一一年九月まで、比較大学史関係の資料・文献について、本部棟である大隈会館（二〇号館）地下の資料センター所管レファレンスルームで利用者の閲覧に供していた。センターは場所的に三分化していたのである。

このうち大隈会館地下のレファレンスルームについては、二〇一〇年一月、大隈会館棟のセキュリティ強化の一環として、移転措置が講じられることとなった。これをうけて、同年一月、総務部と資料センターが協議した結果、同等の収蔵能力を持つ施設を提供することを条件として、資料センター側では大隈会館地階レファレンスルームの移転を承諾した。

その後、資料センターとキャンパス企画部は移転場所について検討を重ね、二〇一一年六月、①東日本大震災による緊急性の高い工事の増加等経済的理由から新規工事の着工はすぐには困難であること、②資料センターの業務効率を考慮すると一二〇号館が望ましいこと、等に鑑み、当面の改修等は行わず、一二〇―一四号館地階の資料センター

書庫に収蔵することとなった。その際、書庫の収蔵量には限りがあることから、今後、収蔵に余裕がなくなった時点で、移転による書籍分の増床を行なうことが申し合わされた。なお、場所については、一二〇号館全体の利用計画が固まっていないこと、および早稲田大学全体の収蔵計画が未定であること等に鑑み、増床が必要になった時点で再度話し合うことが確認された。

以上の確認にもとづき、二〇一一年九月、資料センターでは同レファレンスルーム所蔵の管理資料を、一二〇―四号館地階の資料センター資料庫内に移転した。

その後、移転後の同資料庫内の収蔵空きスペースがかなり厳しい状況にあり、二〇一二年度半ばには残りの収蔵スペースを使いきってしまう見通しとなったことから、二〇一一年六月の申合せにもとづき、二〇一二年三月、旧レファレンスルーム相当スペースの保障を、緊急の問題として要請した。さらに同年八月、担当理事との面談において、この点を重ねて要請し、理事からその責任において対処するとの回答を得た。しかし、スペース問題解消のための措置が講じられないままに、本年（二〇一三年）三月に至った。

東伏見キャンパスへの移転に関して打診があったのは、三月二十七日のことである。これをうけて資料センターでは、ただちに関係者によるワーキング・グループを発足させ、データをもとにスペース問題に関して検討した。しかし、問題の全体像が不鮮明であることから、資料センターが一二〇号館の将来像のなかに如何に位置づけられているのか、東伏見の活用はどの程度の施設規模や質的レベルで保障されるのかについて照会した。

その後、四月一九日になって、キャンパス企画部から一二〇―一号館建替工事の件で現地調査を行いたいとの連絡があったため、建替は決まっていることなのかを確認したところ、三月一六日の臨時理事会で決定済との連絡をうけた。これにより初めて一二〇号館での資料センターの所在そのものがありえないことが判明した。

四月二三日、キャンパス企画部から一二〇―一号館の立替計画に関する説明があり、七月末までに資料センターを東伏見キャンパスに全面移転すること、一二〇―四号館地階は代替施設として使用するため六月末までに移転すること、という案が示された。資料センターでは、このような唐突な建替え方針の説明と、余りにも慌ただしい移転案の提示によって、これにいかに対処すべきか、その対応策に苦慮することを余儀なくされた。

こうしたなかで、東伏見キャンパスの現地見学を踏まえ、五月九日、移転に際しての資料センターとしての要望を関係各方面に送付し、善処方を要請した。以下に送付文書中の「移転に際しての必要条件と要望事項」部分の概要を掲げる（具体的な要望内容は割愛し、各項の後に*を付して要望事項のみを記した）。

【資料①】移転に際しての必要条件と要望事項

(1) 資料の収集・整理・保存スペースの確保

資料センターは、本学の歴史に関する資料の収集・整理・保存・公開を中心機能としており、こうした大学アーカイブズ業務が、調査・研究やレファレンスサービスなど、すべての業務の前提となっています。したがって、資料を収集・整理し、また永久的に保存するためのスペースと施設の確保が大前提です。

以下、移転に際して要する収蔵庫等のスペースと施設について記します。

* 移転時に必要な措置（条件）
 〓 集密書架（可動式書架）が配架できる構造（床加重）、搬出入用通路の確保、二四時間空調、日光遮断措置、セキュリティシステム、追加の可動式書架設置（図書用・資料用）、貴重資料用の特別収蔵庫の設置。移転時に必要なスペース
 〓 史資料用スペース、図書用スペース、特別資料収蔵庫など。


(2) 資料の公開とレファレンス業務の保障

収集・整理した保存資料を公開し、各種レファレンスサービスに応じることは、資料センターの重要業務です。

資料利用に関するおおよその流れは、現在、①電話・Eメール等による問い合わせ(②へ)・申し込み(③へ)↓②資料・文献に関するレファレンス(問い合わせに合致する資料・文献の紹介)↓③閲覧・複写・掲載許可・貸出・寄贈の各種手続き、となっています。現在は週平均50件程度の問い合わせがあり、その一部が③に進んでいます。

レファレンスの内容は、抽象的・専門的な問い合わせが多く、いずれも専門的な調査を要する内容となっています。現在、レファレンスには、助手一名、嘱託二名(大学史担当一名・大問研担当一名)が対応していますが、レファレンス対応のためには、漠然とした依頼に対して具体的な資料・文献を挙げて対応できる専門知識と、調査・確認のため資料・文献に直ちにアクセスできる環境が欠かせません。したがって、仮に早稲田キャンパスにサテライトオフィス等を設けて事務担当者を置いた場合には、こうした対応が困難となります。

今回の移転にともない、資料公開とレファレンス業務が深刻な影響を被ることが懸念されます。特に、学内利用者に大きな不利益が生じることが想定されます。したがって、これを補うための措置が必要であり、その解決策としては、①所蔵資料のデータベース化(検索システムの構築とデータベースのWeb公開)、②所蔵資料のデジタル化(資料の画像化・画像データベースの構築)を促進することが不可欠です。

なお、大隈会館地階レファレンスルームから移転した資料センター所管資料(比較大学史研究関係)については、収蔵・閲覧スペース、図書資料のデータベース化、検索サービスなど、いずれも大学アーカイブズ業務との兼用化が妥当かつ効果的であると考えられます。

以下、移転にともなう必要となるアーカイブズ業務(デジタル化・DB化を含む)、レファレンス業務に対する保障

措置について記します。

*所蔵資料のデジタル化措置Ⅱ所蔵資料のデータベース化、所蔵資料のデジタル化、公開用サーバーの設置。資料公開・レファレンス業務保障のため移転時に必要な措置（条件）Ⅱe.g.公開用検索システムの設置及びサーバースペースの確保、サーバー管理スペースの設置、公開用サーバー機材の購入・設置。移転時に必要なスペースⅡレファレンス事務室、閲覧室、作業室（デジタル化・展示作業を含む）、サーバー室。

（3）展示業務継続のための措置

資料センターでは、創立一二五周年を記念する大隈記念室（二号館一階）の開設に従事し、二〇〇七年一〇月の展示開始以来、その管理にあたるとともに、春（三月下旬から四月下旬）、秋（一〇月上旬から一一月上旬）の企画展や、受贈資料展（六月下旬から八月初め）を開催しています。特に卒業式・入学式を中心とする時期の春の企画展では、学生の関心をひく話題性あるテーマの展示を重視し、ホーム・カミングデーと創立記念日の時期を中心とする秋の企画展では、大隈重信ら創立者や大学そのものの歴史を目に見えるかたちで展示することに心がけています。また、受贈資料展では、前年度に校友・大学関係者から寄贈された資料の一部を展示するとともに、資料を通して本学のあゆみを紹介しています。今回の移転に伴って、こうした展示業務は大きな影響を被らざるを得ません。

資料センターが実施する展示は、早稲田の歴史と伝統を目に見えるかたちで提示することによって、広く社会に「早稲田らしさ」を発信するとともに、学生に対する自校史教育の一環としても重要な役割を果たしています。このことは Waseda Vision150 における「早稲田らしさ」醸成との関係で、特に重要です。東伏見で展示を開催するという方向も考えられませんが、当然のことながら学生多数の参観を得ることは困難化します。展示の基本理念からしても、施設の効率性からしても、現実味はありません。広く一般参観者に展示を公開するという意味でも、在学

生に対する教育を推進するという意味でも、早稲田キャンパス内での展示を維持する必要があります。

*早稲田キャンパスで展示を開催するための措置Ⅱ展示準備作業は東伏見で行ない、設営のみ早稲田キャンパス内で行なうことを想定して、資材・資料の搬入出作業用の措置（車両の確保、美術梱包など）、早稲田キャンパス内での作業準備室の確保、など。

（4）『大隈重信関係文書』刊行事業推進の保障

資料センターでは、創立一二五周年記念事業の一環として、二〇〇四年一〇月より『大隈重信関係文書』全一一巻の翻刻・刊行を推進しています。約七〇〇〇通の書翰を一点一点考証しながら編纂を進めており、その学術性に関し、学会などから高い評価を受けています。これまで一〜九巻まで刊行し、残り一〇巻（二〇一四年三月刊行予定）、および一巻（二〇一五年三月刊行予定）の編纂を残すのみとなっています。

編纂においては図書館での調査が最も重要で、通常、担当者は一日に少なくとも一回、多い時は数回、図書館に調査に出掛け、考証の作業を進めています。移転に伴い、図書館での調査に支障が出るようになりますと、編纂の進捗が大幅に遅れざるを得ず、各年度末の刊行は極めて困難になることが見込まれます。

しかし、出版元のみずす書房と大学との契約等のため、刊行日程の変更は不可能です。したがって、東伏見での編纂スペースに加え、早稲田キャンパス内に編纂のための作業スペースを確保し、編纂業務の効率化をはかることが不可欠です。

*移転時に必要な措置（条件）Ⅱ早稲田キャンパス内での作業スペースの確保、編纂作業に必要な環境の確保。移転時に必要なスペースⅡ編纂作業スペース（東伏見）と臨時作業スペース（早稲田）。

(5) 自校史教育展開の保障

資料センターでは、二〇〇九年度からオープン教育センター設置科目として「早稲田学」を開講し、学生に対して「創設者大隈重信」(前期)と「近代史のなかの早稲田大学」(後期)を講義しています。各大学は、現在、自校史教育を重要な課題として取り組んでいます。本学においてこれを担う資料センターの役割は、WasedaVision150との関わりでも、極めて大きいと考えられます。移転後も早稲田キャンパスにおいて継続・展開していくため、当面、以下の措置が必要となります。

* 移転後に必要な措置ⅡTAの増員とレジュメ印刷の確保(早稲田キャンパス)。

(6) 『早稲田大学百五十年史』編纂業務の推進

資料センターは、二〇一〇年度からスタートした『早稲田大学百五十年史』編纂事業の事務を担当し、基礎作業をすすめています。専用スペースが欠如したままです。責任ある業務遂行のためには、編纂作業の推進と資料の収集・配備のスペースが不可欠です。

百五十年史編纂資料については、独自に大量の複製資料を収集・整理・活用していくことから、原史料を基本とする現在の資料センター保管史料の収蔵スペースとは、はっきり区別しておく必要があります。また、資料センター保管・収蔵史料は公開が前提ですが、百五十年史編纂資料は非公開とすべきであり、両者の扱いには明確な区別が必要です。

他方、百五十年史編纂にあたって資料センター保管の一次資料を十分に活用することは自明のことなので、場所については資料センターとの一体化が不可欠です。

将来的には、具体的な執筆作業開始後に学内教員用の執筆スペースを確保する必要があります。このスペースは早

稲田キャンパス内に確保することが不可欠です。

移転とあわせ、差し当たり以下の措置が必要であると考えられます。

* 移転時に必要な措置（条件）＝図書購入費（図書館での調査困難のため）、収集資料の収蔵スペースの確保（セキュリティ）。

移転時に必要なスペース＝編纂スペース、収蔵スペース、執筆スペースの確保。

（7）その他通常業務の保障

資料センターの業務推進にあたって、各種の委員会や打合せの開催、広報業務、庶務業務などが必要なのは自明です。したがって、最低限、以下のスペースが必要です。また、リフレッシュ・スペースの確保など、適切な勤務環境の保障も不可欠です。

* 移転時に必要なスペース＝事務スペース、会議室、所長室。

三 東伏見キャンパスへの移転経過

移転は資料センターのあり方の基本にかかわる重要問題であるため、緊急に運営委員会を開催して「移転に関する件」を協議することとした。五月二八日には、キャンパス企画部から資料センター側の要望を踏まえた移転先施設の利用案が提示された。また、五月三〇日午前、「大型補助金採択に伴う大学史資料センター機能の移転」に関し、キャンパス企画担当理事と資料センター所長との打合せの場が設定された。

以上を踏まえて、資料センターの臨時運営委員会は、五月三〇日昼に開催された。まず、所長から、資料センターの東伏見キャンパス移転の件につき、キャンパス企画部等に提出した文書（「東伏見キャンパスへの移転について」）に即

して、趣旨と経緯を説明した。つづいて五月二八日付でキャンパス企画部から提示された移転先施設の利用案に関して説明し、そのうえで、①早稲田キャンパス内における必要スペースの確保、②資料デジタル化のための予算措置の確保、の二点が重要懸案である旨を説明した。これをうけて委員からは次のような質問・意見が出された〔●は所長からの応答〕。

○大学の歴史・理念を伝える文書館は本来大学発祥の地にあるべきであり、これを切り離すべきではない。今回の移転はやむを得ないとしても、将来的には早稲田キャンパス内に独立の、あるいは並設の施設を置くことを求めている必要がある。

●大学史資料センターとしても、当初からそのような見地で交渉を進めてきており、あらためて大学理事会に要請したい。

○一〇号館の建て替え後に再入所できない事情について詳しい説明を求めたい。

●獲得した外部資金の趣旨に合致する施設を建設しなければならないためだとの説明をうけている。

○早稲田キャンパス内のスペース確保は、作業上、不可欠であり、その確保に向け強く働きかけていくべきである。

●大学史資料センターは東伏見キャンパスに全面移転するという観点からなされた決定であるが、今後も引き続き要請していきたい。

○移転後の利用者サービス、具体的には資料のデジタル化について詳しい説明を求めたい。

●学外一般の利用者はいうまでもなく、学内利用者の利便性の向上（学内利用を想定した本部資料のデジタル化など）も考慮している。

以上の質問・意見を受けて、最後に所長から、特に、①大学の文書館は大学発祥の地にあるべきこと、②早稲田キャン

ンパス内のスペース確保、の二点については、運営委員会からの要望として取りまとめ、今後あらためて大学理事会に要請したい旨を回答した。

運営委員会（臨時）における協議・確認にもとづき、六月五日、大学本部担当理事等に対し、資料センター所長名で「東伏見キャンパスへの移転について」と題する文書を提出した。以下にその全文を掲げる。

【資料②】東伏見キャンパスへの移転について

当大学史資料センターでは、五月三〇日、運営委員会（臨時）を開催し、東伏見キャンパスへの移転に関し協議いたしました。その際に出された以下の意見につき、運営委員会からの要望として大学理事会に要請することが確認されましたので、これをお伝えし、引き続き善処方を願う次第です。

○ 大学の歴史・理念を伝える文書館は本来大学発祥の地にあるべきであり、これを切り離すべきではない。今回の移転はやむを得ないとしても、将来的には早稲田キャンパス内に独立の、あるいは並設の施設を置くことを求めていく必要がある。

○ 早稲田キャンパス内のスペース確保は、作業上、不可欠であり、その確保に向け強く働きかけていくべきである。

この要望に対し、担当理事から、六月六日、メールをもって「ご要望の一点目に関しましては、私が現段階でお答えできませんので、ご意見として承っております。第二点目につきましては、運営委員会のご意見を踏まえ、協議させていただきます」との回答があった。

六月七日、理事会では「一二〇号館（研究開発センター）の利用計画およびキャンパスの再配置整備の件」が協議・

決定された。すなわち、(1) 研究体制の戦略的強化の一環として、一二〇号館においては、今後、本学の研究機能を集約した施設としての整備を推進するため、研究以外の機能については一二〇号館以外の施設への移転を計画的に進めること、(2) 二〇二二年度文部科学省「地域資源等を利用した産学連携による国際科学イノベーション拠点整備事業」の採択を受け、一二〇―一号館を解体し新研究棟を建設することから、前記の方針に沿い、キャンパスの再配置整備を行うことが決定された。そして、この(2)の一環として、資料センター(事務所・レファレンス・収蔵庫)の東伏見移転も決定された。すなわち、今後も増加する資料の収蔵保管、百五十年史編纂事業、既存資料のデジタル化作業といった新たなスペース不足を解消することが喫緊の課題となっていたが、現時点において、面積の増床とレファレンス機能維持が唯一可能なのは東伏見 STEPS の五階であるとして、同所への移転が決定されたのである。

なお、仄聞するところによれば、理事会の議題書では資料センターの「恒久的移転」となっていたようであるが、当日の理事会では、資料センターの位置づけをめぐって、大学の象徴的施設でありいずれは早稲田キャンパスに戻すべきだ、校友の心のふるさとである母校を象徴する機関だといった意見が出され、結局、「恒久的移転」という表記は削除することになった由である。

理事会決定を踏まえて、キャンパス企画部からは、箇所との協議を反映した工程表の送付があった。

六月一二日開催の資料センターの運営委員会(定例)では、「二〇二二年度 予算の件」のなかで、移転にともなう予算外の支出として、展示等関係の運搬経費(大学車の借用により節減)、印刷費(パンフレット・封筒・名刺等)、などを要することを提示し、承認を得た。また、「移転に関する件」において、一連の経過と施設・設備の見直し、工事と移転作業の日程などについて説明し、①レファレンスサービスの休止、②移転の周知方法、③秋季企画展開催のための運搬と本部スペースの確保、④『大隈重信関係文書』編集作業のための本部スペースおよびマイクロ化・デジタ

ル化の推進などについて協議し、承認を得た。

以上のような意思決定を前提として、キャンパス企画部と資料センターの間では、東伏見 STEPS 五階の施設利用に関する協議・調整が重ねられ、その合意にもとづいて、集密書架の配架を可能とするための増床や、間仕切り、書架の架設などの工事が行われた。一方、資料センターでは、移転という想定外の事態のなかで二〇一三年の夏を迎え、一時、レファレンス等の通常業務を停止しながら、移転のための整理・荷造り等を行い、七月末から八月初め、あわただしく東伏見に移転した。こうして資料センターは、五年間を過ごした二〇号館を去って、「都の西北」のはるか西、西東京市の東伏見に拠点を移して業務を展開することとなった。その結果、前述のような資料センター自体の「身体分離」状況は解消され、また、懸案のスペース問題も解消されたが、大学そのもののセンター（本部）からは地理的に分離され、空間的な「周縁」化は顕著なものとなった。

移転による影響は、まず、秋の企画展に顕現した。パネルの作成や展示物の用意など、展示準備の万般は東伏見において行い、これを会場である二六号館（大隈記念タワー）まで運搬して展示するという方式をとらざるを得なかった。また、予想通り『大隈重信関係文書』の編集作業には、深刻な影響があらわれた。早稲田キャンパス内に作業スペースを確保するという要望が当面実現をみなかったため、會津八一記念博物館の二階にある津田記念室（資料センター管理）の使用を有効化するなどして、移転による影響を極小化しようとした。しかし、やはり中央図書館から離れてしまったことによる効率低下は明らかであった。

四 資料センターの新たな展開方向

しかし、こうした移転、騒動とは別に、本年度、資料センターの今後の活動を方向づける重要な動きもあった。

その第一は、戦争関係の調査への取り組みである。資料センターでは、二〇〇五年の春季企画展「一九四三年晩秋最後の早慶戦」以来、卒業式・入学式シーズンの三月下旬から四月下旬にかけて、「最後の早慶戦：三番レフト近藤清二四年の生涯」（二〇〇九年）、「戦地に逝ったワセダのヒーロー松井栄造の二四年」（二〇二二年）のように、早慶戦（野球）に焦点を当てながら、戦争と学徒出陣の問題を扱ってきた。これをうけて学徒出陣七〇年にあたる今年は、「ペンから剣へ：学徒出陣七〇年」と題する企画展を開催し、各種メディアでも取り上げられるなど、大きな話題を呼んだ。開催期間中（一ヵ月間）の入場者数は三五〇〇名を越えたが、これは、通例の春季企画展の一・五倍近い。学生の関心も高く、企画展とあわせて開催した講演会（元海軍神風特別攻撃隊の江名武彦氏による「学徒出陣と特攻」）では、三二九名の聴講者で大隈小講堂が満員となった。

秋には学徒出陣七〇年をめぐるNHKテレビの放映（二〇月）、ならびに新聞各紙の報道などを契機に、学徒出陣に関して多くの情報が寄せられるようになった。そこで、一〇月以降、聞き取り調査（ビデオ撮影を含む）を連続的に実施するとともに、これに本格的に取り組むこととした。すなわち、資料センターでは、これまで前述の企画展示と関連して、学徒出陣経験者および関係者への聞き取り調査を二八回実施してきたが、関係者の高齢化により調査の実施が急務となっていることから、出陣学徒経験者、繰り上げ卒業生、勤労動員経験者などを対象とする聞き取り調査を推進することとした。

また、戦争犠牲者について、既刊の『早稲田大学百年史』第四巻で早稲田大学関係の戦没者リストを公表し、その後、資料センターでも『早稲田大学史記要』第三四巻・第三六巻・第三九巻で修正・補遺を公表してきている（これまで四七三五名分の名簿を公表）。そこで、『早稲田大学百五十年史』編纂事業の一環として、戦没者名簿の調査事業を本格化することとした。

第二は、この間、意識的に位置づけてきた学内外にわたる協力事業の展開である。佐賀市の大隈記念館とは、大隈祭（毎年五月開催）の記念講演への講師派遣や、企画展への協力などで連携関係を継続している。また、高知県宿毛市の梓立祭や、静岡の遠州稲門会の企画展示などに協力してきているが、今年は、早稲田大学社会連携推進室からの要請により、一二月の「東伏見芸術祭」の開催に協力した。すなわち、「早稲田と同志社―大隈と新島の出会い―」と題して講演を担当するとともに、秋の企画展「大正デモクラシー期の早稲田」によるパネル展（資料センターのスタッフが準備）を開催した。社会連携推進室が実施したアンケートの自由記述欄から、参加者の声の一端を紹介する。

「孫が今年文学部に入学させて頂き、春の早慶戦とか学園祭とかを見学させて頂き、七五歳の私も大変若くなった気分でした。この講演会に参加させて頂き、早稲田の歴史をとて身近に感じ感動いたしました。若い人に負けないように勉強したく改めて感じました。ありがとうございました。今後も参加させて頂きたい思います。」

「良い機会を頂き、早稲田と同志社の関係についてお話を聞けて貴重な知識を頂きました。」

「師走の時期に西東京市民にこのような文化講演会を開いていただき、市民として感謝いたします。年に一度くらいはこのような催し物を、是非開いて、市民の文化意識向上のためにやって頂きたいと思えます（感謝、感謝です）。」

「早稲田と同志社との関わりとしては、早大野球部の旧グラウンドにも名称が残っている安部磯雄が後年重要な働きを示したかと思いますが、今後、安部に関わる企画をご検討頂ければと思います。」

ところで、資料センターではこの間、オープン教育センターで授業科目「早稲田学」を開設し、学生に対する自校史教育に取り組んできているが、これとは別に、私は資料センターのスタッフとともに、オープン教育センターの二〇一三年度夏季科目「同志社と早稲田を結ぶ―大隈重信と新島襄・八重夫妻」の開設に協力した。これは、一五年を経過した同志社・早稲田の学部学生交流制度（国内交換留学）を踏まえ、NHK大河ドラマ「八重の桜」を契機として企画された同志社と早稲田の今年度のみ連携講座である。八月二十六日から三〇日にかけて、同志社から一四人、早稲田から二〇人の学生が受講した。前半は、まず同志社の学生が早稲田に来て、二日間、早稲田の学生とともに、早稲田側が用意した「開校の前提―幕末・維新の時代像」、「東京専門学校の開校―独立・自主の精神」、「大隈重信と同志社」、「同志社と早稲田を結ぶ①―大西祝」、「同志社と早稲田を結ぶ②―安部磯雄」、「同志社と早稲田を結ぶ③―浮田和民」、「資料で読む早稲田の同志社人―大西祝・安部磯雄・浮田和民」の六つの講義を受講し、また、大隈記念室の常設展の見学をはじめとするキャンパスツアーに参加した。つづいて後半、学生たちは、京都・同志社に移動して三日間、同志社側が用意した新島襄・八重夫妻や早稲田と同志社の交流など六つの講義を受講し、新島夫妻を訪ねて同志社を歩くフィールドワーク（講義を含む）に参加した。そして、講義ごとの小レポートと最終レポートで評価するという方式がとられた。

それにしても、この講座を通じてあらためて痛感したのは、早稲田側には、学生が手にして学びうる手頃な本、紹介すべき参考文献がほとんどないという嘆かわしい事態である。新島の論集や自伝は岩波文庫となっている。もちろん、慶応義塾の福沢諭吉は、自伝や著作・論集が岩波文庫などに収められているし、手にし得る多数の出版物がある。しかし、大隈重信・小野梓らの事績や言説を、学生らがつぶさに、あるいは系統的に学ぶよすがは、極めて少ない。

二〇一四年度をもって『大隈重信関係文書』の編纂事業は完了する。そして、二〇一五年度からは「早稲田大学百

五十年史」の編纂事業が本格化する。そうしたなかで、「本学の歴史、創設者大隈重信および関係者の事績を明らかにし、これを将来に伝承する」ために、本資料センターが果たすべき役割はいよいよ大きい。

いずれにしても、早稲田の早稲田らしさは、重ねてきた歴史に根ざす。心のふるさと早稲田から歴史に関する記録・記憶のための装置を失ったままでは、大学の中枢は中枢の機能を果たし得ない。